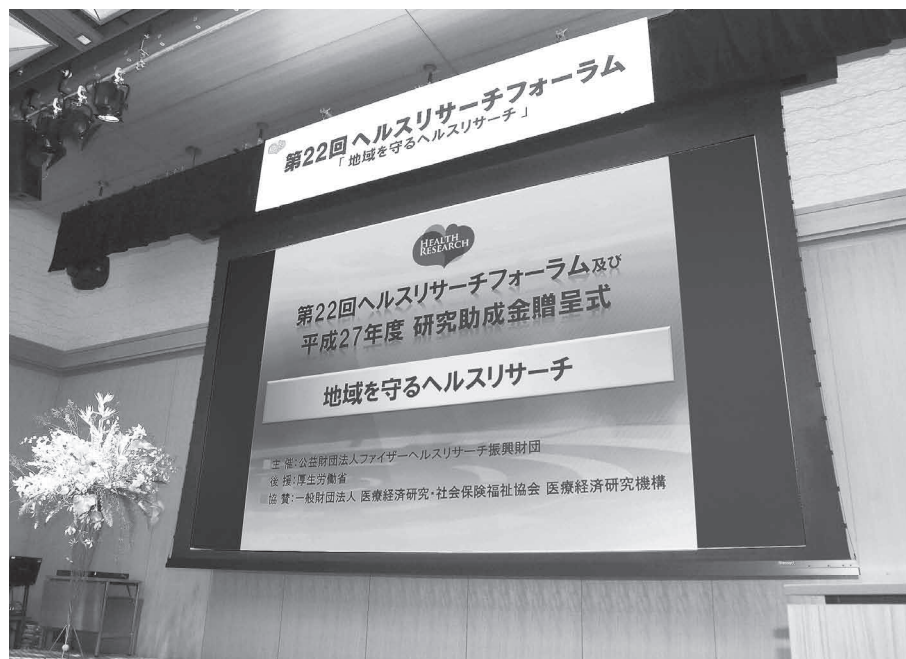


挨拶



来賓挨拶



上田 真由美

一般財団法人
医療経済研究・社会保険福祉協会
医療経済研究機構 研究主幹



梅田 一郎

ファイザー株式会社
代表取締役社長



島谷 克義

公益財団法人
ファイザーヘルスリサーチ振興財団
理事長

主催者挨拶

主催者挨拶

公益財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団 理事長

島谷 克義

主催者を代表して、ご挨拶を申し上げます。

本日は第22回ヘルスリサーチフォーラムおよび平成27年度研究助成金贈呈式にご出席を賜り、誠にありがとうございます。また、日頃は当財団の事業活動に多大なるご支援とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

本日の会では、厚生労働省大臣官房厚生科学課長 椎葉茂樹様、医療経済研究機構研究主幹 上田真由美様、ファイザー株式会社代表取締役社長 梅田一郎様よりご挨拶をいただくことになっております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日のプログラムは、ヘルスリサーチフォーラムでは合計30題の研究発表がございます。平成25年度に助成を受けた27の演題と、一般からご応募いただいた3演題です。そのうちの12演題が、既に午前中のポスターセッションで発表が行われ、大変活発な議論がなされておりました。午後はこのホールで18題の研究発表が行われる予定ですが、引き続き熱心な討議が交されるものと期待をしております。

フォーラムに引き続き、平成27年度の研究助成受賞者の発表ならびに研究助成金贈呈式が行われます。選考の詳しい経緯と結果は、委員長の永井先生から後ほどご説明をいただきますが、本年も199件という、大変多くのご応募をいただきました。ご応募いただいた皆さまには、厚く御礼を申し上げます。

この中から、厳しい選考を経て、33の研究が助成対象として採択されました。今年も競争倍率が6倍という、大変厳しいものでした。採択された皆さまには、心よりお慶びを申し上げます。

これにより、平成4年に当財団が発足して以来、合計で770件が採択され、助成総額は18億410万円になりました。これもひとえに、主たる出損企業であるファイザー株式会社ならびに関係団体や個人の皆さまのご尽力の賜と、深く感謝いたしております。

さて、このヘルスリサーチフォーラムでは第1回から、その年のフォーラムのコンセプトを表すテーマを掲げてきております。初めの10回ぐらいまでは『医療とは何か』というテーマが中心でしたが、続く5回は『医療におけるヘルスリサーチの役割とは何か』という、一歩突っ込んだテーマが多くなり、最近の5年間では『社会とヘルスリサーチのつながり』が共通のテーマとなっておりまゐりました。そして今年は、ご覧のように『地域

を守るヘルスリサーチ』というテーマが掲げられております。これは現在の日本の医療の喫緊の課題を反映したものと言えます。

このように財団の助成研究には、時代の要請を先取りした内容が多いのですが、その中で今回のテーマにふさわしい研究の一つ、ご紹介させていただきます。それは平成20年に研究助成を受けられた佐賀大学循環器内科の琴岡憲彦先生のチームによる『遠隔モニタリングを核とした心不全診療チームの連携により、再入院率を低下させることができるか検証する』という、まさに高齢化を迎えた地域医療の可能性を探る、極めて重要な研究です。

琴岡先生のお話によりますと、財団の助成によってご自分たちが最初に行った研究で、遠隔モニタリングにより再入院が低下するというポジティブな結果が出たのですが、その後、海外の大規模試験で逆の結果が報告され、一時は大変落胆をされたそうです。しかし、ご自分たちの最初の試験に自信があったので、数年前に大規模比較試験を開始し、その試験がほぼ終了して、間もなく成績を発表できるところまでこぎ着けたとのことでした。

これら一連の研究から、遠隔モニタリングの価値は監視そのものにあるのではなく、診療チーム内のコミュニケーションを円滑化する効果が最も重要であるということを見られたそうです。この成果に基づき、慢性心不全を全て在宅で診ることができる支援チームを大学内に設置することになったとのことでした。

この研究はまさに当財団が目指しているヘルスリサーチにふさわしい研究と考え、紹介をさせていただきました。この内容は、私どもの機関誌である「ヘルスリサーチニュース」の最新号の『温故知新』というコーナーに掲載されていますので、ぜひご覧ください。

今年度の助成研究の中からも、このような素晴らしい成果が得られるものと期待をいたしておりますし、私どももヘルスリサーチの振興に向かって、今後も努力をしてまいります。

皆さまの引き続きのご支援とご協力を賜りますようお願いをして、ご挨拶とさせていただきます。